

## 長沼 直兄 年譜

(年齢は誕生日後の満年齢) 作成：河路

西暦 (元号)	年齢	事跡 (*印は関連事項)
1894(明治 27)	0	11月16日 群馬県伊勢崎市近郊に長沼宗雄の三男として誕生。
1915(大正 4)	21	6月、東京高等商業 (一橋大学の前身) 入学。
1919(大正 8)	25	3月、同校卒業。
1921 (大正 10)	27	10月、2年近く勤務した貿易商社を横浜支店閉鎖を機に退職、自宅で勉強中に、隣人のアメリカ人宣教師に頼まれて日語学校の臨時教師となる。 同年、アーサー・ローズィニス (Arthur Rose-Innes) と知り合い、同氏の漢字辞典の全面改訂に協力。
1922(大正 11)	28	5月ごろ、文部省語学顧問ハロルド・E・パーマーの東京高等師範学校における連続講演に出席。これが機縁となり親交を結ぶ。この時よりパーマーの英語教育における教授法を日本語教育に取り入れる。 11月、アントネット・ファルキーと結婚 (アントネットは後に長風社代表として長沼直兄の著書の出版にあたる)。
1923 (大正 12)	29	5月、文部省内に英語教授研究所 (The Institute for Research in English Teaching) 設立、パーマー所長に就任、長沼直兄は幹事に就任。パーマーは1936年まで在任し、全国での講演、教科書作成等のほか、長沼直兄とともに NHK の英語放送を開始するなど、多方面で活躍した。 9月、関東大震災で日語学校、焼失。同校の神戸移転を機に退職。 10月、パーマーの推薦で米国大使館日本語教官に就任
1925(大正 14)	31	1月、秩父宮殿下が4月より2年間、世界各国の視察に外遊することとなり、長沼直兄、パーマーとともに英語のご進講を行う。 同年、パーマーの英語教科書作成に協力、『The Standard English Readers for Beginners』に引き続き、『The Standard English Readers』の材料収集、「那須与一」などの英訳を担当。
1927(昭和 2)	33	協力してきたパーマー著『The Standard English Readers』(全5巻)完成。
1928(昭和 3)	34	長沼直兄、パーマーの意を体して『機構的英文法』『機構的英文法解説』『初等英文構成練習書』(日本語)を執筆 (同年、パーマーの著作として刊行)。 12月、英語教育、日本語教育関連の出版社、(株)開拓社の取締役就任。
1930(昭和 5)	36	かねて米国大使館で試用中の自作テキストをもとに『標準日本語読本』シリーズに着手。
1931(昭和 6)	37	『標準日本語読本巻一』刊行。1934年にかけて全7巻の刊行完成。和綴じ布表紙の上製本と、洋綴じ上製本の2種。戦時下のアメリカ陸海軍で使われ、ナガヌマの名を広めることになる。
1939(昭和 14)	45	文部省より7月に臨時日本語教科書編纂の囑託、12月に図書局事務の囑託を受ける。
1940(昭和 15)	46	6月、興亜院より中国蒙疆方面の日本語教育事情視察のため出張を命ぜられる。
1941(昭和 16)	47	8月、米国大使館首席教官を辞任。文部省内に「日本語教育振興会」が設立されるにあたって理事に就任。
1942 (昭和 17)	48	4月、東京女子大学講師、特設予科で日本語授業を行う。9月、「日本語教育振興会」理事兼研究部主事に就任。南方派遣教員養成所で教授法を担当、外地向け教材作成に携わる。10月、『ハナシコトバ』『同学習指導書』刊行。 12月、財団法人 日本語教育振興会常務理事兼総主事に就任。

1943(昭和 18)	4 9	陸軍省、文部省の関連懇談会等に多く出席。文部省南方派遣日本語教育要員養成所講習会で「日本語教授法概説」を担当。 12月、大東亜省支那事務局事務を委嘱される。
1944 (昭和 19)	5 0	東京女子大学講師辞任。3月、「財団法人日本語教育振興会」認可に伴い、常務理事文部省嘱託に。教材に関する関係官庁連絡会議に教科書編纂委員長として出席。8月、大東亜省嘱託にも就任。
1945 (昭和 20)	5 1	2月、『First Lessons in Nippongo』刊行。7月、大東亜省嘱託を解かれる。 10月、米軍の依頼により米軍将校に日本語を教え始める。 12月、『Everyday Words and Phrases』(英語会話語彙)刊行、三省堂 10 万部日本語教育振興会理事長に就任、事業終了後解散申請することを決定。
1946(昭和 21)	5 2	3月、連合軍将兵に対する日本語教授者講習会にて特別講義を担当。 「言語文化研究所」創立、理事長に就任。 4月、米第八軍「アーミー・カレッジ」教官に就任。 7月、外務省・文部省共管「財団法人言語文化研究所」設立許可。
1947(昭和 22)	5 3	1月、米軍総司令部顧問となり、参謀第二課日本地区語学科主任に就任。
1948(昭和 23)	5 4	4月、在日宣教師団・在日外国人有志の要請により財団法人言語文化研究所「附属東京日本語学校」を開校、校長に就任。『標準日本語読本』の全面改訂を進め、全 8 巻を刊行 (非売品)。軽井沢分校開設。
1949 (昭和 24)	5 5	中国から総引き上げの宣教師の大量入学など学習者急増のため千代田区神田と港区芝に分教場。野尻分校開設。
1950 (昭和 25)	5 6	第 1 回「日本語教師養成講習会」その後毎年夏に行われ回を重ねる。 『改訂標準日本語読本』シリーズを開拓社より一般向けに刊行。
1952 (昭和 27)	5 8	6月、渋谷区の現在地に新校舎完成、移転。 7月、講和条約発効、米国大使館日本地区語学校語学主任となる。 『First Lessons in Japanese』刊行。『Practice Book Vol.1 Part 1』(このあと続刊、1965年に『Vol. III』)刊行。
1954 (昭和 29)	6 0	日本語教師養成講習会の修了者による「日本語教師連盟」発足。
1956 (昭和 31)	6 2	欧米の外国語教授の実態視察。
1957 (昭和 32)	6 3	健康上の理由により校長を退職。釘本久春理事、校長事務取扱となる。
1958 (昭和 33)	6 4	視聴覚部を設けて視聴覚教育の研究・教材開発に着手。
1961 (昭和 36)	6 7	6月、米国大使館日本地区語学校語学主任を辞任。
1962 (昭和 37)	6 8	校長に復職。森清と共著で『Practice Japanese』、同 LP レコード 3 枚
1964 (昭和 39)	7 0	3月、東京日本語学校校長を辞任。名誉校長となる。『改訂標準日本語読本』巻 1 より巻 5 までの再訂を始める (1967年、「巻 5」刊行により完成)。
1965 (昭和 40)	7 1	11月 3日 勲三等瑞宝章を受ける。
1966 (昭和 41)	7 2	軽井沢分校を閉鎖。夏の日本語教師講習会は以後、渋谷の本校で 1985 年度まで実施。
1968 (昭和 43)	7 4	6月、言語文化研究所理事長辞任。理事となる。
1973 (昭和 48)	7 9	2月 9日、心筋梗塞にて逝去。2月 23日 正五位を贈られる。 実弟、長沼守人、言語文化研究所 理事に就任。

#### 参考文献

- 河路由佳編 (2009)「創立者 長沼直兄 (1984-1973) 年譜」『東京日本語学校開校 60 周年記念誌』  
(財) 言語文化研究所附属東京日本語学校  
(財) 言語文化研究所 (1981)『長沼直兄と日本語教育』開拓社